

市立美術報 だより

発行 鹿児島市立美術館 〒892 鹿児島市城山町4番36号 TEL (0992) 24-3400

館藏品誌上ギャラリー②



解説文

安藤 照は明治25年(1892)に鹿児島市に生まれる。幼い頃から手先が器用で小刀を手離さず、いつも、木を削ったり、竹笛を作ったりしていた。鹿児島二中を卒業後、早稲田大学の商科に進むが、彫刻家への夢断ちがたく3年で中退、母の許しをやっと取りつけ東京美術学校彫刻科に入学する。美校3年のとき、第3回帝展に出品した「K女」が入選、翌年の「流れ」は特選となり、早くも頭角を現す。続いて第6回、第7回、第8回帝展と連続特選、同時に第8回出品作品が第1回帝国美術院賞を獲得する。昭和2年(1927)には一躍帝展委員に選ばれ審査員となる。

東京渋谷駅前広場の「忠犬ハチ公像」や鹿児島の「西郷隆盛像」の作者として有名である。

本作品「女の首」は大正12年(1923)、美校を卒業した年の東台塑造展の入選作品である。平べったい顔、どこにでもいるような日本人の顔、あたりの空気と触れ合いながら、いささかの抵抗も感じさせることがなく、穏やかである。しかも、柔和さのなかに、強靱な造形性という芯が一本通っている。安藤が対象に対して抱いた共感、つまり対象から受ける衝動が伝わってくるようである。この初期の作風は、美校で師事した朝倉文夫の影響を受けて、写実的な表現がみられるが、やがて、塊人社を結成(1929)、彫刻を「量のかたまり」としてとらえ彫刻の本質的な造形性、特に量感の表現の追求へと進む。ヨーロッパに渡り、マイヨールの作品に彫刻の生命である量感を見だしたことから、帰国後はマイヨールを感じさせる豊かな丸味のある作品がみられるようになった。

安藤照「女の首」1923年頃 (59.0×20.8×21.6)